堆積する海底ごみを漁船で回収、美化啓発が瀬戸内海を救う

農林水産大臣賞　　岡山県　山陽女子中学校地歴部

おだやかな内海に大小さまざまな島が点在する景観が魅力の瀬戸内海。漁業が盛んで、特産のシャコやカニなど海の幸の恩恵を享受している。その豊かな美しい海で今、深刻な環境問題となっているのが「海底ごみ」だ。同校地歴部では、漁船から海底ごみを回収する活動と、ごみの発生抑制のための啓発活動の両輪を軸に据えて、2008 年から解決に取り組んでいる。

回収活動では、同じく海底ごみに関心を寄せる浅口市寄島町の漁業者の協力を得て、地歴部の生徒が漁船に乗船し、沖に出て底曳き網を入れて、網にかかったごみを回収し分別。網には、魚介類にまじって、ペットボトルや空き缶、プラスチックや電化製品がひっかかるなど、日常生活に関係するごみや鉄骨・電気製品等の産業廃棄物が多い実態が明らかになった。

船上での回収活動を通じて、海底ごみの多くは瀬戸内海に注ぐ河川から流入する生活ごみであることを突き止めた生徒たちは、生活ごみの発生を抑制するための啓発活動も開始。認知度の低い海底ごみをまずは知ってもらうために、遊びの要素を取り入れた「海ごみかるた」を作って地域で出前授業をするなど、「見える化」して啓発効果を高めているのが最大の特徴だ。

また、閉鎖性海域である瀬戸内海の海底ごみ問題の解決には、沿岸域全体への呼びかけが必要であることも痛感。生徒は対岸の香川県に出向き、インパクトのある海底ごみの展示説明会を開催しながら、点ではなく面で捉えて「つながる活動」を展開している。

「**数年前まであまりいなかったシャコが増えてきました。海底に堆積されたごみが減り、魚たちが戻ってきたのを実感しています**」。回収に関わる漁業者、大室欣久（よしひさ）さんが手ごたえを語る。

船上での作業は 3 時間以上におよび、酷暑の夏も凍える冬も年間を通して行っている。使命感と責任感を持って取り組みながら、環境国際会議にも毎年参加し、世界に向けて情報発信する生徒たち。

「海底に沈む前に　海へ流れ出る前に　手元を離れる前に」―そんな合言葉を胸に刻み、海底ごみがなくなるその日まで、瀬戸内海を舞台にした力強い舵取りは続く。

岡山県山陽女子（さんようじょし）中学校地歴部

学校長：塩山　啓子
生徒数：178 名（2016 年 11 月末現在）地歴部員数：10 名
住所：岡山県岡山市中区門田屋敷 2-2-16
電話：086-272-1181
アクセス：路面電車「東山」駅より徒歩約 3 分

写真上：漁業が盛んでおだやかな内海の瀬戸内海、上から 2 番目：寒さの中、漁船で海底ごみを回収する女子生徒、上から 3 番目：何十年もの間、海底に沈んでいたごみはさまざま、下：海底ごみの展示発表会で関心を寄せる多くの住民たち